

テルアビブ国際ワークショップ報告

“Profession, Identity and Status: Translators and Interpreters as an Occupational Group”

鳥飼玖美子

(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授)

“Profession, Identity and Status: Translators and Interpreters as an Occupational Group” と題する国際ワークショップが、2009年3月15日から19日まで、イスラエルのテルアビブで開催された。イスラエル学術振興会 (Israel Science Foundation)、テルアビブ大学 (Tel Aviv University)、バーイラン大学 (Bar Ilan University) の共催によるもので、実行委員はテルアビブ大学 Rafeket Sela-Sheffy (Head, School of Cultural Studies; Chairperson of the Unit of Culture Research), Gideon Toury (M. Bernstein Chair of Translation Theory), バーイラン大学 Miriam Shlesinger (Head, Language Policy Research Center) であった。

世界各国から19名の研究者を招聘し、イスラエル側からはほぼ同数の発表者および傍聴者が参加して、4日間にわたり12のセッションが設けられた。最終の第12セッションは、まとめのラウンドテーブル会議であり、参加者による発表は28本であった。そのうち、4本が社会学、2本が教育学関連であり、5本が通訳者の職業意識についてのアンケート調査、博士課程院生もしくはポストドクによる若手の発表が6本であった。質的調査に関する発表はアンケートなどの量的調査に比較すると少なく、教員のナラティブ分析が1件あったものの、オーラルヒストリー手法についての発表は鳥飼一人であった。

ワークショップで見られた発表内容の傾向は、近年の通訳翻訳研究の流れを色濃く反映している。まず、通訳翻訳研究がプロダクト(訳出物)からプロセス(訳出過程)へ視点を移動させ、最近では「通訳者・翻訳者」という人間に焦点を当て始めた推移を考えると、「通訳者翻訳者の職業、アイデンティティ、地位」というワークショップのテーマ自体が研究動向の最先端である。Franz Pöchhacker は『通訳学入門』(2008, みすず書房、原著 “Introducing Interpreting Studies,” 2003, Routledge) で、通訳学の研究動向を ‘going social’ と表現したが、社会学への志向性を明示するかのごとく、ワークショップには社会学者が4名招かれ、社会学の視座から「職業 (profession)」について論じた。通訳翻訳研究者による発表でも、Reine Meylaerts (CETRA)、Ruth Morris (Bar Ilan) などが翻訳者、通訳者の役割観、アイデンティティなどを取り上げ、何名もが社会学者ブルデュー (Pierre Bourdieu) の「ハビトゥス (habitus)」概念に言及した。社会学的アプローチによる量的研究も、ウイーン大学のポエヒハッカーによる AIC 会員対象のウェブ調査、Robin Setton による上海での調査、Helle Dam (Aarhus 大学) によるデンマークの調査をはじめ多く、トゥーリーが危機感を表明したほどである。トゥーリーは最終日の総括で、「我々はこれまで、社会的コンテキストを考慮に入れずに言語学的アプローチを批判してきたが、社会学的アプローチと称する量的調査ばかりになっては振り子が揺れ過ぎたのではないかと危惧する」と発言した。それに対し Itamar Even-Zohar は、「振り子はいずれ落

ち着くところに落ち着くだろう。今後の研究方向としては人類学の知見(文化人類学、言語人類学を指すものと思われる)を、もっと積極的に取り込んでいくべきであろう」と語った。参加者からも、Claudia Angelelli などからは通訳翻訳研究者による調査が、統計処理も含め厳密な手法によらず安易に行われていることへの批判がなされ、より根本的な問題としては、Anthony Pym を筆頭に、アンケートによる量的研究に対する懐疑的な見方が相次いだ。多くの参加者から、インタビュー手法に関する研究の重要性、研究方法論についての集中的な議論が必須である点も指摘された。

鳥飼の発表は、ライフストーリー・インタビューによる戦後日本の通訳者像をゴフマン(Ervin Goffman)の参与フレームワークで分析したものであったが、オーラルヒストリー手法の功罪についても論じた。その点に関連して、シュレジンガーから「個人史という極めてプライベートなデータを研究素材として分析する倫理的問題は、どうなのだろう」という質問があった。オーラルヒストリー研究の中心的素材となるライフストーリー・インタビューでは、事前に使用目的を説明した上で同意の署名をもらい、インタビュー書き起こし、その英語訳ともに全部を調査対象者に送付して必要な修正を加えてもらい許諾を得たこと、但し、そのデータをどう分析したかは事前には知らせず、論文完成後に博士論文を贈呈した、という体験を語った。イーヴン＝ゾウハーは、鳥飼の次に発表した自分の教え子が「チェーホフの手紙の日本語訳」を素材にしていたことに触れ、「プライベートなデータを扱うことの倫理性をいふなら、作家の書簡をデータに使うことだって倫理的問題となりえる。チェーホフは、まさか自分が家族に宛てて書いた手紙が翻訳研究のデータに使われるとは予期していなかったろうから。ということは、そこまで気にしていたら研究はできないし、気になるなら故人となった人のデータを使えば良い」と半ば冗談まじりに発言して会場を沸かせた。一方で「このように分析した」という論文の草稿を調査対象者に読んでもらい、そのフィードバックを研究に含めることも面白いという提案をした。但し、その場合、調査対象者が分析結果に異議を唱え、研究自体が成立しなくなるリスクはある、という点も昼食時の雑談の中では出た。

ワークショップ全体を振り返ると、量的調査方法の妥当性や信頼性についての疑問、インタビューの倫理的問題など、最終的には通訳翻訳研究における方法論に関する議論が中心となった感があり、これこそが現在の通訳翻訳研究が抱える課題であるという印象を強くした。

ワークショップには、トゥーリーの師であるイーヴン＝ゾウハーも最初から最後まで参加しており、トゥーリーの指導を受けたのがセラ＝シェフィとシュレジンガー。その弟子である院生たちが実行委員として実務を担当するなど、テルアビブ大学の4世代にわたる通訳翻訳研究者が企画立案から実施までを担った。通常の学会と異なり、同時間帯に発表を配することはなく、全員が円卓を囲んで座り、朝 10 時半から夕方6時まで、すべての発表をお互いに聞いて討論し、セッションの司会も全員が分担して行った。参加者を地域別に見ると、欧米(米国、ドイツ、オーストリア、ベルギー、イタリア、スペイン)、北欧(デンマーク)、南米(アルゼンチン)、アジアからは中国、日本であった。但し、これは発表者の所属大学による分類であり、各個人

の出身地となると、英国出身でイタリアの大学で活躍している David Katan、オーストラリア出身でスペインの大学で国際博士課程を立ち上げたピム、アルゼンチン出身で米国の大学にいるアンジェレーリをはじめ、トルコやアイルランド出身でドイツの大学で活躍しているケースなど、更に多彩となる。ワークショップの最後に、海外からの参加者全員が各人の母語で主催者に対しお礼を述べたが、カタルーニャ語から北京語、オーストリア手話まで入り壮観であった。用意された地中海沿岸のホテルに全員が宿泊しバスで大学まで送迎されたため、朝食から 10 時のコーヒー、昼食、3 時のコーヒー、夕食と終日行動を共にすることとなり、ネットワーキングには格好の機会となった。

ワークショップの全体像は、次の URL で見ることができる。

<http://www.tau.ac.il/tarbut/Workshops/Professions2009>

なお、国際ワークショップの成果は、Translation and Interpreting Studies (John Benjamins) から特集号として 2 巻続けて刊行される予定である。編者は両号とも、ワークショップを企画運営した Miriam Shlesinger と Rafeket Sela-Sheffy の二人である。特集号 (1) は 2009 年 12 月、特集号 (2) は 2010 年 2 月刊行予定で、それぞれ 7 本、全部で 14 の論文が収められる。鳥飼による日本の通訳者についての論考 (Conference interpreters and their perception of culture: From the narratives of Japanese pioneers) は 2 巻目に掲載予定である。

.....

【著者紹介】

鳥飼玖美子 (TORIKAI Kumiko, Ph.D.) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授(委員長)。日本通訳翻訳学会会長。

